

章立て

はじめに

第1章 炎上というメディア文化

第1節 炎上のメカニズム

第2節 2ちゃんねるからの変遷

第2章 政治文化から立ち返る

第1節 日本の政治文化

第2節 どのように責任感は生まれるのか

第3章 これからのメディア文化

おわりに

はじめに

私は日本人という民族は非常に道徳的であるという印象を持つ。これは価値観の共通認識から他人に迷惑をかけることや逸脱した行為を極力避ける現実の社会的性格からであると考えている。また、日本人は法的秩序に遵守する傾向が強く、他国に比べ犯罪発生率も低い。罪を犯せば責任を取り、罪を償う必要があるからであろう。つまり、日本人は日本人としての自覚と行動に対する「責任感」を持って生活している。この政治文化は現実社会に強く根付いている。

情報技術の発達とともに Twitter 等のソーシャルメディアが一般的に普及した。「我々」は情報をタイムリーに入手でき、家族や知人に限らない不特定多数との繋がりを可能にした。しかしながら、ソーシャルメディア上では扇情的な発言や攻撃的な発言を頻繁に目にする。また、日常的に過激な賛否両論が積み重なり「炎上」と称される現象が発生する。賛否が飛び交い、しばしば互いを傷つけ合うという状況が生じる。まさに無責任な争いが仮想空間で繰り広げられているのだ。特に批判が急激に募った際には、不特定多数が「支配的な正義」を振りかざし、「私刑」をおこなっているとさえ感じる。近年では、芸能人が炎上によって容赦ない誹謗中傷に苛まれ、テラスハウスに出演していた木村花さんが自殺という選択をした。この話題は日本中に波紋を呼んだ。

フジテレビの番組「TERRACE HOUSE (テラスハウス) TOKYO 2019-2020」に出演していたプロレスラー木村花さんが23日に亡くなったと、木村さんの所属団体「スターダム」が同日発表した。22歳だった。関係者によると、同日未明に都内の自宅から心肺停止で救急搬送されたという。

テラスハウスは複数の男女がシェアハウスで生活する様子を放送する恋愛リアリティー番組。昨年5月から動画配信大手のネットフリックスで配信され、フジテレビでも放送されている。木村さんの死去を受け、ネットフリックスは5月26日と6月2

日の配信を、フジテレビは5月25日深夜の放送を休止すると発表した。

番組内での出演者とのやりとりをめぐり、SNS上では木村さんを誹謗（ひぼう）中傷するコメントが集まっていた。木村さんのものとみられるインスタグラムのアカウントには23日未明、目を閉じた自身の写真とともに、「愛してる、楽しく長生きしてね。ごめんね」というコメントが投稿されていた。（一部抜粋）

（『朝日新聞』2020.5.25朝刊,社会面、『「テラハ」に出演、木村花さん死去 フジテレビが放送休止』）

私はこのようなソーシャルメディアの状況に問題意識を持った。現代社会におけるメディア文化と政治文化の「我々」には社会的性格の乖離が生じている。「炎上」が日常的に生じるというメディア文化の「我々」を社会学的な観点から明らかにしたい。マス・メディアからソーシャルメディアへの過渡期である現在のメディア文化を考察することで、メディア文化の将来的な行く末と、「我々と社会」の変化を理解する礎としたい。

そこでソーシャルメディアにおいて人々を過激にさせるものが「匿名性」ではないだろうかと仮説を立てた。なぜなら現実社会とソーシャルメディアにおいて最も大きな相違点と言えるからである。現実社会では社会に出る以上立場が示されることから言動には、責任を持たざるを得ない。しかしながら、ソーシャルメディア上では年齢不詳や性別不詳、職業不詳など個人情報を開示しているユーザーは数少なく、自由な言動が可能であるのだ。たとえステータスが表示されていたとしても他人であることに違いはなく、互いの顔や素性が分からない状態で行われる、テキストのやりとりだけでの様々な発言は時に物議を醸すことや誹謗中傷に値する事態が起こっている。

この「匿名性」に焦点をあてた仮説に、先行研究や推論を通して、更なる正当性を見出したいと考える。大きく分けて二つの視点から考察をおこないたい。第一に、「炎上」というものはなぜ引き起こされるのかを明確にし、これまでソーシャルメディアの変遷を明らかにしようという視点。第二に、日本人の政治文化の過去に立ち返って考察をすることで、現在のメディア文化との間に類似がみられるかという視点である。これら視点によって、「匿名性」を主体とする仮説が有効だと示した上で、その都度の詳細な検討をしていきたい。

第1章 炎上というメディア文化

第1節 炎上のメカニズム

荻上チキは「サイバースペースにおいて各人が欲望のままに情報を獲得し、議論や対話を行っていった結果、特定の-たいていは極端な-言説パターン、行動パターンに集団として流れていく現象」であるサイバークスケードが「炎上」のメカニズムであると述べている（荻上 2007:34-35）。「炎上」というメディア文化は日常茶飯事になり、SNS上で頻繁に目にするようになった。人々は自らをエコーチェンバーの中に閉じ込めてしまうのである。そのような集団分極化という構図がより明確になった要因はソーシャルメディアにおいて人々に仮面を付けさせる「匿名性」ではないだろうか考えることは可能であり、仮説の正当性を高める。ユーザーは「匿名性」を纏い実に希薄なつながりを作り上げ、サイバークスケ-

ドを生み出していく。そのため、自作のエコーチェンバーから抜け出せなくなり、自らに都合の良い情報だけを集め、過激化する「炎上」が歯止めの効かない幻想世界へと誘うのだと考察する。

だが、ここで一度「匿名性」は無関係なのではないかという反論の立場を検討する。メディア情報技術の向上によるソーシャルメディアの登場自体が、不特定多数から過激な言葉が飛び交う「炎上」を生み出したのではないだろうか。荻上は、炎上について「フレーミングは単に「ネットによって人々が過激にさせられた結果なのではなく、ネットが人の過激な部分を表出させ、可視化させ、つなげていった結果」であるとすら言えるかもしれない」と考えている（荻上 2007:94）。本来から人々が以っている社会的性格をソーシャルメディアが映し出したのではないかということである。

佐藤俊樹は「情報技術や情報科学自身はとても重要だし、役に立つ。ただ、それで社会も語れると思うのはまちがいである。＜中略＞技術が社会にどう接続されるのかは、社会の側から決まってくる。そして、社会がどう変化するかを考えるためには、まず社会自体知らなければならない」と述べている（佐藤 2010:77-78）。このことから、社会側が求めることで情報化は進歩し、ソーシャルメディアというもの生み出したのだと考えることができる。

つまり、「炎上」はソーシャルメディアが登場したことで発生する現象であるとは言い切れないことから、「炎上」の要因はソーシャルメディアの登場自体によるものではないという反技術決定論の立場を取ることができる。本来持っていた社会的性格に「匿名性」を付与することで、人々が無責任であると錯覚させる。メディア文化において、人々の社会的性格が根底にあるからこそ、ソーシャルメディアによって如実に可視化されるということではないだろうか。

第2節 2ちゃんねるからの変遷

ソーシャルメディアの発達段階として、2ちゃんねるから Twitter 等の SNS へという変化によってもたらされたものを検討したいと考える。2ちゃんねるは「ひろゆき」（西村博之）によって 1999 年 5 月に設立された匿名掲示板である。2017 年に「5ちゃんねる」へと名称を変更したが、現在でも多くのユーザーによって利用されている。

伊藤昌亮は 2ちゃんねる最初の大規模な炎上（当時まだ「炎上」という語は用いられていない）は東京都小金井市の女性市議員をターゲットにしたものだったと述べている（伊藤 2019:308）。2000 年 4 月 9 日の石原慎太郎元東京都知事の「三国人発言」に伴い、講義のメールを都庁に送るよう呼びかけていた市議のサイトの掲示板に非難のメッセージが 16 日頃から殺到した。そして、17 日には 2ちゃんねるにスレッドが立てられ、誹謗中傷のメッセージが大量に書き込まれた。そのなかには性暴力を教唆するような表現も含まれていたという。市議は自らの掲示板を閉鎖し、2ちゃんねるのスレッドの削除申請を管理者に申し出るが、かえって 2ちゃんねらーの強い反発を呼ぶこととなり、攻撃が激化した。結果として、市議は極度の心労から 29 日に市の委員会長を辞任するに至った。その後も、2ちゃんねるでは執拗に攻撃が繰り返された。

この炎上は当時、右派による「キャンペーン」であると考えられていた。極右系や保守系のユーザーが中心となり、外国人排斥という思想を強く訴えたいがために、その対立者として市議を攻撃したのではないかということだ。初期の段階では、左右のイデオロギー対立という枠組みで展開された炎上であったが、後続のスレッドではその論点はあまり重要ではなかった。伊藤は 6 月 1 日のスレッドに関して

「目につくのは市議その人に対する激しい反感の表現だ」と述べている（伊藤 2019:320）。「ムカつく」「腹立つ」「怒り心頭」などイデオロギーではなく個人に対する誹謗中傷へと変化していった。つまり、これはネオナチ極右クラスタによってきっかけが生み出され、市議その人が気に入らないという理由でその騒ぎに参戦したユーザーが多かったということだ。彼らは「独善的で高慢ちきな匂い」（伊藤 2019:313）に強く反応し、大規模な炎上へ発展させていった。本来の論点に立ち返ることなく、仲間とともにターゲットを笑い倒し、笑い殺すことが目指されたということである。

このことから、2ちゃんねるで発生した大規模炎上とは少数による反論から始まったにも関わらず、周囲を巻き込むかたちで収拾不能な状況へと発展させる独特な文化であったといえる。集中的にターゲットに対する反感が高まっていく様子を楽しんでいるのだ。それは「匿名」が作り出す、実に利己的な雰囲気である。伊藤は「批判の眼差しが正々堂々と相手に向けられるのではなく、いわば薄暗がりのなかから冷笑とともに相手に注がれる」と表現している（伊藤 2019:312）。

2ちゃんねるで始まった「匿名」による局所的な炎上騒ぎは SNS へと引き継がれたといっても過言ではない。誰もが「匿名性」を抱え、炎上騒ぎに加担していくことは本来サブカルチャー的でアンダーグラウンドな2ちゃんねるの炎上が、「匿名」から「実名」まで多くのユーザーが存在し、オープンワイドである SNS へと移行する過渡期である。ここでソーシャルメディアの変遷によって炎上文化に変化が訪れたと考察する。それは炎上騒ぎに参加するユーザーの多様性が認められたことである。2ちゃんねるでの炎上の独特で特徴的な点は、一枚岩の批判が無限に増幅し、相手を論断することであった。SNS は性質の異なるユーザーで構成されている。そのため炎上騒ぎにおいて賛否両論が取り留めなく発散され、議論が成立していなくとも、多種多様なコメントで埋めつくされるのである。そこには分かりやすい目標というものが存在しない。つまり、炎上騒ぎに参加するユーザーに分極化が生まれたのである。「匿名性」と「多様性」が創り出す炎上文化は実に混沌としているが、政治文化と類似する変化であると考えられる。第2章では日本の政治文化を明らかにすることで、メディア文化の行く末をさらに検討したい。

第2章 政治文化から立ち返る

第1節 これまでの日本の政治文化

次に、日本の政治文化を過去に立ち返って考察をすることで、「匿名性」を要因とする「炎上」を生み出すメディア文化の社会的性質がみられるのではないかを考察したい。

現実社会における日本人の政治文化は先に述べたとおり、共通の価値観と法的秩序を遵守する傾向があり、非常に道徳的であると考えられる。政治文化の現在と過去を比較するにあたり、過去の日本人の政治文化の特徴が顕著にみられた第二次世界大戦直後に焦点をあてたい。そこで丸山眞男が日本軍国主義における精神構造を考察した論考の集大成を纏め、古矢旬が編集した研究を参照する¹⁾。

ナチスの指導者は今次の戦争について、その起因はともあれ、開戦への決断に関する明白な意識を持っているに違いない。然るに我が国の場合はこれだけの大戦争を起こしながら、我こそは戦争を起こしたという意識がこれまでの所、どこにも見当たらないのである。なんとなく何者かに押されつつ、ずるずると国を挙げて戦争の渦中に突入したというこの驚くべき事態は何を意味するのか。我が国の寡

頭勢力によって国政が左右されただけでなく、寡頭勢力がまさにその事の意識なり自覚なりを持たなかったということに倍加されるのである。(丸山眞男 1946:30-31)

今日において、しばしばドイツと日本は超国家主義であったと称されるが、そこには大きな相違点があったということである。それは日本がその戦争責任の所在を明らかにすることができなかつた点が挙げられる。つまりは、自らが戦争を起こしたという自覚がなかつたのである。戦前は天皇を主権とする国家であり、個人というのは絶対的権威の前に埋れていた。天皇からの距離で権力が測られ、総理大臣ですら自らの発言を天皇の威光に頼つたのであつた。天皇を中心に「国家」を第一とする日本の集団意識は戦時中の国家総動員法や集団自決といった行動からも理解することができる。第二次世界大戦という国家間の争いがこの政治文化を形成したと考えること可能であるが、戦後の日本と状況が類似するドイツと比較することで日本の政治文化の特徴を明らかになった。

また丸山は「主体性を喪失して盲目的な外力にひきまわされる日本軍国主義の「精神」こそが日本ファシズムを生み出したのだと考える(丸山 1946:174)。軍人の多くが、個人的には反対であつたが公に言うことができなかつたと、敗戦後に弁明したのだ。天皇を絶対的権威とした日本人の集団意識は戦争に対して同調したのにもかかわらず、責任を追求されれば「国家」がそのような潮流であつたことに原因があるとし、個人的な責任ではないと答えるのだ。丸山はこれを「無責任の体系」とすると素描した(丸山 1946:203)。

私は先述した丸山がいう「無責任の体系」によって引き起こされた第二次世界大戦が、ソーシャルメディアの「炎上」と結びつくのではないかと考える。戦後の日本人は「国家」という集団の中に身を隠し、個人の責任ではなく「国家」の責任であると総懺悔したのである。つまり、「国家」という「匿名性」が日本人の責任感を喪失させたのではないか。このことからソーシャルメディアにおいても「匿名性」がユーザーを「無責任」の渦に巻き込むのではないかと考えられる。田中辰雄・山口真一は「炎上はごく一部の人が書き込んでいるに過ぎない」と述べている(田中・山口 2016:117)。つまり、ソーシャルメディア上で議論されたものをネット世論という言葉で表現することは誤りであり、寡頭勢力であるユーザーが引き起こす「炎上」に他のユーザーが巻き込まれ「無責任」に積み重なつた極端な意見を目の当たりにすることで、賛同が賛同を呼び、批判が批判を呼ぶ。つまり、「炎上」は偏つた見解が正当性を持っているような感覚に人々を陥れる。これはメディア文化における「無責任の体系」として考えることができる。このことから、戦後日本の現実社会では民主主義という考え方が浸透し、共通の価値観と法律を深く思慮するという、個人が「責任」を持つ社会への変遷がはっきりと示された。これはメディア文化においても将来的に同様の変化が見られるのではないかと前向きに捉えることを可能にするのではないか。

第2節 責任感をどのように持つか

「匿名性」はプライバシー保護の観点で重要な性質を持っている。そのためソーシャルメディアでは個人を特定できないユーザーで溢れかえっている。良くも悪くも「匿名性」によって自由な発言が可能になった。ソーシャルメディアが普及する前、テレビ局や新聞社といったマス・メディアを通して間接的にしか、人々は大衆に発信することができなかつた。ところが、現在では自らの意志で自らを発信す

ることが可能になったのである。当初、この情報技術は人々の議論を活性化させるのではないかと期待された。しかしながら、身のある議論はおこなわれずにサイバーカスケードによって意見が集中分極化する「炎上」が日常的に発生し、もはや民主主義を脅かすものとして問題視されることもある。そこに加わる人々は無意識に賛否に加担する行動を取っていることが大きな課題である。責任感のある議論がおこなわれるのであれば、無限に広がるインターネット空間は民主主義を発達させるものであるはずなのだ。

現在のメディア文化と政治文化では社会的性格が異なる。この「炎上」の最たる要因を「匿名性」であるとする仮説に説得力を持たせるために、日本の政治文化における性格の変遷を歴史社会学という観点で分析することは有効であり、第二次世界大戦後の事例から日本人が「国家」という集団における「匿名性」を盾にいか「無責任」であったかを理解することができた。ソーシャルメディアにおいても「炎上」という現象は「匿名性」が「無責任」もたらしたことで生じるメディア文化の特徴であると、演繹的に説明することができるのである。

このことからメディア文化と政治文化の関連性が垣間見え、「責任感」が仮想空間であるインターネットを利用するユーザーで芽生える可能性が示された。「匿名性」を排除するという解決策ではなく、「匿名性」のメリットを残存させた状態で「責任感」を各々が持つことが喫緊の対応として求められるべきだ。

第3章 これからのメディア文化（仮）

トマス・ホッブスの「万人の万人に対する闘い」という有名なフレーズがある。ホッブスは「自然的自由の状態に必然的に伴う、すべての人はすべての人に対する戦争という悲惨な状態から脱却することであって、それは、目に見える権力が、かれらの情念を刑罰の恐怖によって抑制することができて、自然法と契約に服従させるのでなければ、おこるのである」と述べている（ホッ布斯 1864=1992:305）。これは自然状態における人間の利己的な有様を表している。そこで人々は権力としての国家を生み出すことで秩序を築いたのだとするのが社会契約説である。私は「匿名性」をおびたソーシャルメディアは自然状態であると考え、匿名で発する過激な言葉は人間の利己的な行動である。まさに誰もが無責任に行動したことで、「炎上」という闘いが起こるのではないだろうか。他方、昨今ではソーシャルメディアの発言によって逮捕や損害賠償を請求される事例は少なからず増加している。つまりは、名誉毀損罪や侮辱罪という法的罰則が絶対的権力となり、無差別な「炎上」は回避されるのかもしれない。誹謗中傷に対し、民事訴訟を起し、勝訴している事例は存在している。

俳優の春名風花さん（19）がインターネット上で自身や両親を中傷する投稿をされたとして、投稿者を特定して民事で訴えていた問題で、春名さんは20日、投稿者が示談金315万円を支払うことで示談したことを明らかにした。刑事告訴は取り下げるという。

春名さんがユーチューブに投稿した動画での説明によると、投稿者はツイッターで春名さんについて「名誉男性」「両親が失敗作」などと投稿した。春名さんはツイッター社やプロバイダーに情報開示を求め、投稿者を特定。刑事告訴や民事提訴をしたと

ころ、投稿者の代理人弁護士から示談したいと連絡があったという。

春名さんは「相手の人格や生活を破壊する度を越えた嫌がらせは、誰のことも幸せにしない。書いた自分にも少なからずダメージを与えます。やめましょう」などと話した。

春名さんは今年5月の朝日新聞の取材に、投稿者の身元特定につながる情報開示には、裁判などで100万円以上の費用がかかり、約1年かかったと説明。今回の投稿者以外からも多数の中傷や嫌がらせがあり、提訴と告訴をしたことについて「ネットで誹謗（ひぼう）中傷することは罪になる、匿名で中傷しても身元はいずればれるということを社会に知らせたい」と話していた。（神宮司実玲）

（『朝日新聞』 2020.7.21 朝刊, 社会面, P28『ネットの中傷、315 万円で示談 春名風花さん「誰も幸せにしない』」²¹⁾

ソーシャルメディアはその様相が現実社会に近いものへと変化する過渡期ではないだろうか。「炎上」と少し離れるが、フェイクニュースが注目を集めた結果として誤った判断が世論によって下される可能性は以前から懸念されていた。誰もが発信者となることのできる現代ではファクトチェックに関して未熟な部分が多々みられる。「炎上」はそのような無法地帯で日々生じているのだ。しかしながら、プラットフォーム提供者（ルーラー）によって内部整備がおこなわれていることも確かである。2ちゃんねるは「ひろゆき」を絶対的な管理者としており、2ちゃんねらーはまさに自由で無責任な書き込みを積み重ねることを制限されることはほとんどなかった。一方で、Twitter 等の SNS では、その拡散力と危険性がゆえに、攻撃的な行為を禁止する対処をしている。信憑性が低いものに対して削除を実行することや、ヘイトスピーチや名誉毀損等をおこなったユーザーの情報開示請求に応じるなど発展の兆候がみられている。

戦後日本の政治文化では現在に至るまで道徳的に共通な価値観が認識され、健全な法整備がなされてきた。今後、メディア文化においても政治文化のように秩序がつけられ、ソーシャルメディアという情報技術によって、社会の側から民主主義社会を発展させる正しい利用がされるのではないか。政治文化の変遷を通して、メディア文化の将来的な行く末が幾分か明らかになったことだろう。

おわりに

研究をする上で先述したとおり、「匿名性」がメディア文化に影響を与えるという仮説を立てた。そして、炎上のメカニズムと政治文化の変遷を分析対象としたアプローチをし、現代日本社会におけるメディア文化がどのように発展していくのか、歴史社会学的な観点から明らかになった部分が少なからずあった。

現在、ソーシャルメディアを代表する Twitter では自らのツイートに対し、不特定多数が返信することができないように設定できる。また暴言や脅迫、差別的言動といった誹謗中傷を運営者に報告することが可能であり、コメントの削除やアカウントの凍結が実行される。一方で、2ちゃんねるは「ひろゆき」を管理者とする独裁的なプラットフォームであった。スレッドの削除を拒否する彼自身のカリスマ性に

惹かれて 2ちゃんねらーは結束力を高めていた。このことから 2ちゃんねるから Twitter へ移行するメディア文化の過渡期であるといえる。独裁的で一枚岩であった「2ちゃんねる」から、社会的責任を負う Twitter 社が管理し、多様性が受け入れられている「Twitter」などの SNS というソーシャルメディアへと変化が生じていると考える。

これまで「匿名性」はソーシャルメディアのある種の特徴であった。そして、これは日本の政治文化における戦後の「無責任の体系」に類似するということが分かった。他方で、政治文化が発展していったように現在のソーシャルメディアが一般的になったメディア文化にも発展の兆しがあるということだ。ソーシャルメディアがもたらす「炎上」は議論を破綻させ、時にターゲットを不特定多数 vs 個人や少数という構図で目の敵にする。今後、ソーシャルメディアはより社会に根ざし、インターネット上のやりとりはさらに増加すると考える。このメディア文化の行く末はプラットフォームと法的規則を整備するだけに留まらず、社会に接続するユーザーたちが自らの言動に責任を持ち、建設的な議論や相手の立場を考えるとといった現実社会と大差のないソーシャルメディア社会へと発展する必要がある。「我々と社会」は日々進歩していく。だからこそ、メディア文化と政治文化での乖離が徐々に埋まっていく期待が高まるのだ。その先には、誰もが安心してソーシャルメディアを利用することのできるユートピアが広がっているのではないだろうか。それはユーザーの自身のためであり、インターネット上で関わる他ユーザーのためでもあるということだ。

[注]

- 1) 戦後、丸山が執筆した論文集であるが、この度参照する古矢が現代版へ訂正し編集したことから出版元を前述した岩波文庫とする。文献リストには、丸山が述べた年度と論文のタイトル等を明記したい。ページ数はこの度使用する文献のものとする。
- 2) 署名者がいるために参考資料リストに、記事の文末の記者を表記する。

[文献]

- 伊藤昌亮, 2019, 『ネット右派の歴史社会学』 青弓社.
丸山眞男;古矢旬編, 2015, 『超国家主義の論理と心理 他八篇』 岩波文庫.
———, 1946, 『超国家主義の論理と心理』 岩波文庫, 雑誌『世界』5月号.
———, 1949, 『軍国主義の精神形態』 吉田書房, 雑誌『潮流』, 5月号.
佐藤俊樹, 2010, 『社会は情報化の夢を見る』 河出文庫.
田中辰雄・山口真一, 2016, 『ネット炎上の研究：誰があおり、どう対処するのか』 勁草書房.
トマス・ホッブス, 1864=1992, 『リヴァイアサン 2』 岩波書店.

[参考資料]

- 朝日新聞データベース 聞蔵Ⅱビジュアル
———神宮司実玲, 2020, 『ネットの中傷、315万円で示談 春名風花さん「誰も幸せにしない」』